

# 沼津の地場、新技術に挑む

沼津は戦前の軍需工場を源流に精密ネジの生産が始まり、全国でも有数の集積地だ。しかし安価な海外製品との競争が激しく、中小ネジメーカーは構造転換を迫られている。沼津の地場産業はこの壁を乗り越え、姓(よみがえ)るか。復活への兆しを探った。

## 精密医療や耐熱鋼利用 国際競争を乗り切れ

### ネジは甦るか

#### 培ったワザ活用

のが救急救命器具として使った「呼吸補助器」。ネジという部品にとどまらず、完成品に姿を変える。

患者の肺に空気を送り込み、呼吸停止を防ぐ人工呼吸の補助員として開発した新製品には、空気が通る弁の部分などにネジで培った加工技術を導入した。「精密な接線を

座を進める取引先からのコスト削減要求は厳しい。付加価値の高い分野の開拓が必要」と医療にかける意気込みを語る。「数年前は売り上げのほとんどが自動車だった。今は約二十億円のうち六割まで下がった」と自動車依存からの脱却を進める。

新素材への挑戦で国際競争に勝ち抜こうという企業もある。伊豆半島四

部、戸田港近くを生産拠点を構えるイズラシ(沼津市、堤親朗社長)だ。「冷間圧造による耐熱鋼加工技術の開発」。イズラシが二年前から始めたプロジェクトは、自動車の排気管に欠かせないタービンの中核部品の素材をステンレスからより高温の熱に耐えられる「耐熱鋼」に転換する試み。「既存のステンレス素材だと熱で溶けてしま

自動車や電機向けの出荷がほとんどを占める沼津のネジ産業の中で、異色の分野に進出した企業がある。東海郵品工業(沼津市、盛田延之社長)だ。

一九九九年にハードディスク用駆動装置向けの微細なマイクロネジ、二〇〇四年には人工歯根、母接ぎ用など医療用ネジの生産を始めた。次に狙

ったのが救急救命器具として使った「呼吸補助器」。

盛田社長は「主力の自動車は受注量も安定している。だが、海外生

産技術が試された。冷間圧造は金型を使い常温でプレスする製造方法。切削加工に比べコストが安く大量生産が可能

技術力を武器に、自動車や電機メーカーの海外展開に伴う国際競争に対抗する沼津のネジメーカー



東海郵品の盛田社長は医療分野への進出など、新市場の開拓に力を入れる

鮮な空気をたくさん肺に送れば、患者の蘇生を

明究には東海大学開発工学部が協力した。健康関連産業の集積を目的に県が進める「ファルマバレープロジェクト」で初

沼津のネジ 沼津商工会議所などによると、沼津のネジの歴史に欠かせない存在が大正期創業の大川螺子(らし)製作所だ。東京で機械加工職人として修行した創業者が戦前、出身地の沼津市に工場を新設した。大川螺子製作所で学んだ技術者らは相次いで独立し、市内にネジ工場を広がっていった。

### 「大川螺子」が源流 90年代から減少傾向

として栄え、戦後から高度経済成長期にかけては、沼津のネジ技術に目をつけた大企業の工場立地が進んだ。自動車、電機、機械向けに地場のネジメーカーは製造を拡大し、1980年代までは生産量の増加が続いたという。

90年代に入ると海外に生産拠点を持つ企業が現れ、生産量は減少。高齢化を背景に廃業する零細企業も多く、90年代後半から企業数は減少傾向にある。



人材仲介で支援 技術力を武器に、自動車や電機メーカーの海外展開に伴う国際競争に対抗する沼津のネジメーカー